

さくら第512号

令和 4年 8月

さくら

発行所 さくらそろばん
 発行者 平瀬 重雄
 春江町境 17-7:℡51-1337
 hirase@mx2.fctv.ne.jp

とまがく
 具体的に動いて
 具体的に動いて
 具体的な答えが
 出るから
 K.C.H.A.

『数感覚を養うために』

計算する時に、「だいたいどのくらい」という“数感覚”が算数ではとても大事です。「 $33 \times 55 = 16665$ 」と書いても何らふしぎだと思わないのが困ります。 33×5 の答えを書く時に1桁左へずれて書くから、1815を16665と書いてしまいます。

そろばんで4桁10口の足し算をする時に、答えは10,000～99,999の間ですが、1桁多く書いても、おかしいと思いません。

加減算で、10口目に+9,000とあるのに、答えが9,000以下でもおかしいと感じません。

先の 33×55 は、約 30×60 とだいたいの数で考えれば1,800ですから、答えが出た時にパッと気づくはずですが、数感覚がとぼしいと気づきません。

数感覚を身につけるには、「数に親しむこと」と「暗算力の強化」が大事です。

ふだんの生活の中で数字について考える機会を多く持つことが大切と情報誌「AERA」で著者は示しています。

最適なのは買い物のなかで、「おつりの小銭を少なくするにはいくら払えばいい?」、「この商品の30%引き後のねだんはいくら?」などと子どもに問いかけることが大事といえます。

暗算力では、頭の中で数字をイメージし、短い時間でいいから記憶しておけるかどうか重要です。

また、その両方を満たす「補数」の感覚を身につけることも大切です。2級の見取算から補数、マイナス計算ができてきます。補数とは、ある数字に足すとちょうどキリのよい数字になる

数のことです。学校ボランティア授業で小学3年生と4年生の授業で、「おつりの計算」として補数をあつかっています。

1,000円持っていて876円払えばおつりはいくらかという計算で、そろばんに876といれば、1,000にくり上がる数は、そろばん珠のいれてない数で最後の数はくり上がる数を入れるので124とおつりがすぐ分かります。

補数ができれば、 $652 - 593 = 652 - 600 + 7 = 59$ のように分解して計算できます。

「算数教育指導用語辞典」に数に対する感覚について次のような説明があります。

①位取り記数法、数の分解・合成、数の大小・相等(割合)などの感覚。②数の相対的な大きさの感覚。③計算の性質、結果を概数で見積もる感覚。④日常用いられる数の感覚を育成することの重要性が指摘されています。

つまり、数をかたまりでとらえる力や、数をバラバラにする力、数の大きさ比べなどができる感覚です。

100玉そろばんは数量感覚を養うのに役立ちますし、トランプで神経衰弱ゲームなども取ったカードを数えることで数字と数を結びつけるのに役立つといえます。

桁数の多い数を2, 4, 9などの小さな数で割った時の余りが素早くできる力も身につけたいものです。

過日、福井市内のある書店で文庫本1冊とレジの近くに置かれたワゴンの中のハンカチが30%引きなので3枚買ってレジへ渡すと20歳前半と思える男子店員から2,420円と打ち出したレシートをもらいました。

買う時に見た商品はすべて30%引きなので合わせて約5,000円と計算していたので、あまりの安さに驚き店員に告げるとげんな顔をします。30%を80%と見間違えた計算です。

いくら値引きでも書店で80%安くはしないだろうし、だいたいいくらかという数感覚の乏しさからのミスだと思います。機器に100%頼っているから出た数を鵜呑みにしています。考えるクセを身につけたいものです。